



from WASHINGTON D.C.



ホワイトハウス (北側)

## Pennsylvania Avenue

ワシントンD.C.の目抜き通りの一つである Pennsylvania Avenue は、米国連邦議会とホワイトハウスを結ぶ道でもあります。今年1月20日に就任したオバマ大統領も、就任演説を議会正面の特設会場で行ったのち、この道をパレードしてホワイトハウスへと向かいました。

その両者の位置関係から、議会とホワイトハウスは、しばしば“Both Ends of Pennsylvania Avenue”（「ペンシルベニア通りの両端」）と表現されますが、これは、その地理的な意味を超えて、両者の関係を含意しているようです。

アメリカ合衆国憲法の定めに基づき、立法権は連邦議会に帰属する一方、大統領は行政権を掌握するほか、施策の審議を議会に勧告し、また、議会で可決された法案が法律になるに先立って大統領の署名（承認）が必要です。このため、政策立案・実行にあたっては、立法府（連邦議会）と行政府（大統領）との連携が重要ですが、両者の間に対立があることは稀ではありません。

連邦議会の議員は上院・下院を問わず、合衆国を形成する各州の代表であり、有権者は自らが選出した議員の法案に対する投票行動（賛否）を注視しているため、議員は出身州の民意を無視することができません。このため、与党の所属議員であっても、大統領の意向に従うとは限らないのです。一方、選挙人制度という枠組みの下で全国的な選挙で選ばれた大統領は、国民の支持を背景に、議員に協力を求めて働き掛けることや、署名の拒否（不承認）を示唆して議会での法案審議に影響を及ぼすこともあります。オバマ大統領は、外交・安全保障に加え、金融経済にかかる課題が山積するなかで就任したこともあって、議会との連携にとりわけ配慮していますが、出身政党の民主党が与党であるにもかかわらず「ペンシルベニア通りの両端」での綱引きに格闘しているとみられています。こうした綱引きは、米国経済の展望に影響を及ぼすことから、その帰趨には目が離せません。

（日本銀行ワシントン事務所）



ペンシルベニア通りに臨む米国連邦議会



大統領を支える政府機関の一つ、米国財務省